地域と学校を結ぶ
―小須戸の町屋と子どもたち―

小林　朗

はじめに

小須戸小学校区コミュニティ協議会が活発に活動している。江戸時代の在郷町の町屋を保存して、地域を生活している人たちに知ってほしいという願いから年に何回か会を開催している。地区外ではなく、地区内の交流が最大の眼目である。地域に生活している中学生がその輪に入ることは自然である。中学1年生の総合「地域調査」に町屋調べを入れることにした。

一　在郷町と町屋

一七世紀後半、越後は西廻り航路と河川舟運で多くの商品が集積して各地に在郷町が誕生する。白根、小須戸、村上、津川、亀田、五泉、新津・村松といった現在の市町村の原型が登場する。江戸時代が地方の時代といわれる理由である。

小須戸が村から町に発展を遂げたのも同時期といえる。慶長十五（一六一〇）年「新津組ほと役帳」にはわずか五軒の役屋百姓の村であった。周辺農村（横川浜や水田、小向など）の活発な開発を背景に急速に戸数が増え、寛文七（一六六七）年には一一〇軒、人口一二四人の在郷町へと発展することになる。延宝七（一六七九）年に、商売繁盛を祈願して町の中心に住吉社を建設する（現在の商工会館：本町二丁目）。

商品の集積は在郷町に宝永年間（一七〇四～十一年）六斎市（月六回の市）を設ける。現在でも小須戸地区

は矢代田が五・一〇、小須戸が三・八で市が開かれている。小須戸は野菜に雑貨類、矢代田からは薪と割木などが出された。後年、馬市も開かれた。

在郷町小須戸には、町屋（「町の中にある歴史的な建物」）がつくられた。町屋は、敷地が奥に細長い、敷地いっぱいに建物を建てる特徴がある。その町屋が現在でも小須戸の場合、残っている。町屋といえば、「人形さま巡り」で村上が有名であるが、新潟大学工学部建築学科の岡崎篤行研究室によると、小須戸の町屋は村上に匹敵すると指摘している。

小須戸町の絵図は小須戸町史にある文政九（一八二六）年のものが一番古い。この地図を元に町屋を岡崎研究室は調査している。

町屋の残存数は全部で三五〇棟のうち九十九棟、二八％である。国指定伝統的建造物群保存地区（川越や高山）での町屋の残存数は約三〇％。ほぼ小須戸は全国平均といえる。町内ごとに細かく小須戸の町屋の割合をみると、本町二・四丁目が特に多く、両方とも約五〇％の町屋が残っている。

小須戸の町屋は他の町の町屋と比べて建物の改造が少なく、建築年代が古い。道幅もちょうど良いといえる。これらは大火の関係があるが、小須戸は明治三四（一九〇一）年に大火があった後、町の火事がない。そのため、他の町の町屋と比べて、建物が立派に見えるのである。

小須戸の町屋・町並みには五つの特徴がある。

第一は大きな庭を持っている。一般的な町屋の庭は坪庭といって一坪程度の小さな庭であるが、小須戸は雪下ろしや井戸の利用など、大きな庭（中庭）が特徴である。第二は「鼻隠し」が残っている。これは、屋根の三角部分に二重に板が付いているところをいう。これは小須戸の町屋にしかない。立派に見えるし、貴重なものである。第三は町屋の脇に玄関・倉庫などの空間がある。これも小須戸の町屋しかなく珍しい。第四は連子格子がほとんどで、一階部分に付いている。格子の連なりが美しい。第五は町並みに変化がある。大半の町屋は妻入り屋根（屋根が三角）か平入り屋根（屋根がまっすぐ）に統一されているが、小須戸は双方があり、町並みに変化が見られる。

小須戸の町屋は村上や京都に匹敵するすばらしいものである。しかし、小須戸に住んでいながら、中学生たちはこの町屋のことをよく知らない。町屋を知ることこそ地域で生活することである。

二　総合学習「地域学」を学ぶ

二〇〇七年度、小須戸中学校の一学年の総合学習は大きく分けて三つのテーマ学習になっていた。

四～五月にかけてはメディア・リテラシーで、コンピューター室を利用して情報収集の方法を学ぶ。

六～九月は「職場訪問」を行う。小須戸地区の職場を主に中学生は訪問する。美容院や花屋、郵便局などどの学校でも訪問するが、本校では果樹農家や酪農をされている農家に訪問するのが特徴である。

十月～三月は地域調査を生徒は学ぶ。一年生一一八人を六班に内容別に分けて学習する。

・町屋　・墓調べ　・寺院と神社
・石碑　・小路調べ　・方言

この総合学習で生徒たちは町屋を調べることになる。まず、小須戸小学校区コミュニティ協議会が発行している「かわら版」を使って、生徒たちは事前学習をする。生徒の家庭にこの「かわら版」が二回配布されているために、資料として持参していている生徒もいた。

本校の一年生は男子生徒を中心に歴史が大好きな生徒たちがかなり存在する。特に数人のアスペルガーの生徒たちにその傾向が強い。中には、学校の図書館にある石ノ森章太郎『漫画　日本の歴史』全五十五巻を読破している生徒もいるくらいである。

そのために、町屋や寺院など調べることに積極的であった。

あわせて、私の社会科の授業で地域史や地域学を学習するようにした。

地理学習では「身近な地域」で、小須戸の本町の町屋について授業を組んだ。この場合も資料は小須戸小学校区コミュニティ協議会が発行した「かわら版」を元に行った。生徒の反応は実際、町屋を見ている生徒と見ていない生徒では全く違う。しかし、ほとんどの生徒が全国に誇れる町屋が小須戸にあるのを驚いていた。歴史学習では小須戸の歴史を学ぶ。鎌倉時代の新仏教で、小須戸の寺院を調べる。戦国時代、上杉謙信の父、為景は浄土真宗（門徒）を弾圧する。そのために、矢代田地区には浄土真宗の寺は一つもない。すべて曹洞宗の寺院である。江戸時代、小須戸の村々が開発される。それを受けて、小須戸にも浄土真宗の寺が歴史の舞台に登場する。町屋がある本町の中心に向かい合って、曹洞宗の茂林寺と浄土真宗の了専寺が建っ

ている。江戸時代の学習では、在郷町をキイワードにして、江戸中期の「諸産業の発達」の単元で学習を深める。

中学生が町屋の学習をする場合、その実物を見ることと歴史的背景を知ることが大切になってくる。特に、中学生は感性が豊かな時期である。実物を見ることは何よりも大きな衝撃を受けることになる。

町屋の班、二四人は二月七日（木）に小須戸小学校区コミュニティ協議会の村井豊さんのガイドで実物を見学する。男女の生徒たちの驚きはすごいものであった。一緒に見学した私にもその感動が伝わってきた。

最初に訪問した町屋は入口から生徒たちは驚く。入口の戸が上から閉まるようになっている。お店の部分にはすばらしいショーケースがあった。奥に入って行く通路は土である。カビがはえてこないという。中庭、上框（あがりかまち）はすごい。次の町屋は二階が明り取りのある階段になっていた。村井さんのガイドに生徒たちは耳をそばだてている。生徒たちを倉庫の二階にあげて、村井さんは本町全体の風景を見させてくれた。町屋の鼻隠しが観察できた。生徒たちは歩きながら、町屋を見学し、江戸時代の雰囲気に浸る。その途中で、生徒たちの表情が興奮して紅潮するのがよくわかる。同行した教師、新潟日報の記者の方も生徒以上に感動していた。

三　地域と子ども

すばらしい町屋が小須戸には存在する。しかし、あってもそれを説明してくれる方がおられなくてはどうにもならない。小須戸小学校区コミュニティ協議会の村井さんがいなくては実物を生徒は見ることはできなかった。村井さんは学校の保護者でＰＴＡ役員もされている。中学生を持つ親として、中学生のガイドもとてもよかった。

地域と学校＝生徒を結ぶのは、地域の大人の方である。その方が地域を子どもに発信していこうという強い意欲を持っておられた。地域の方々が子どもたちに地域のことを知ってもらおうという意思がしっかりとある。地域で生きている人々が自分たちの生活を次の世代にバトンタッチしていくのである。地域全体が呼吸しているように私は感じられた。

町屋そのものはすばらしいものであるが、この調査を通してわかったことは小須戸には地域＝コミュニティが存在していることである。

この地域に育まれて、小須戸中学校の生徒たちは成長している。地域の眼はいつも生徒たちにあたたかいまなざしを向けてくれている。中学生一人ひとりが成長の階段を登っていくことを地域全体で見守っているのである。小須戸の中学生が健やかに育つ理由がそこにある。

江戸時代、小須戸は在郷町として急激に発展した。そして、町屋が多く建てられた。現在、この町屋を保存することで地域の方々は小須戸を次世代へ継承していこうとしている。

中学生は総合学習の体験学習で、その町屋の存在を初めて認識できた。

小須戸の本町二・四丁目にある町屋は歴史的にも誇れる建築物であると同時に、地域と中学生を結ぶ大切な文化財といえる。

今後とも生徒たちと共に小須戸の歴史的な町屋を学んでゆきたい。「5月11日（日）、小須戸小学校区コミニュティ協議会による町屋探索が行われた。30人以上の参加で盛況であった。何度町屋を見ても新たな発見があっておもしろい。」

（こばやし　あきら・新潟市立小須戸中学校）

学費は受益者負担でよいのか（その1）

全国私立学校教職員組合連合（私教連）が今年5月に発表した。経済的理由で私立高校を中退した数は407人（二十八都道府県、生徒数195、264人）、0・21％で、前年度の調査（0・11％）を0・1％も上回っています。

また公立高校の初年度負担金（授業料、制服、教科書代等）は日本高等学校教職員組合（日高教）の昨年10月の調査（25道府県4政令市　110校）によれば、平均総額で全日制が三十二万円、定時制で十万四千円となっています。なかには総額で四十万円を越える学校も女子で14・7％もあります。また経済的理由で公立高校を中退した生徒がいると回答した学校は26％もありました。

今年4月、千葉県のある高校の入学式で入学金が未納で、新入生二人が入学式に出席できない事件がありました。県教委は「やむを得ない判断」と言い、当の学校は「苦渋の選択」と言っていました。

全国私教連は年収五百万円以下の世帯の授業料を全額国に助成を求める署名を展開中です。（大）